

尹東柱詩の翻訳問題再検討

——茨木のり子による伊吹郷訳評価を通して——

金智英 KIM Jiyoung

はじめに

ユンドングジュ
尹東柱の詩集『空と風と星と詩』(윤 1948)は、韓国ではロングセラーとなり、世界中で翻訳出版され、日本ではもちろん多くの国で読者を得ている。

日本では尹東柱の没後39年目にあたる1984年に、伊吹郷によって初めて尹東柱全詩集『空と風と星と詩』(伊吹 [1984] 2010)の完訳がなされた。その後1989年には茨木のり子の『ハングルへの旅』(茨木 1989: 241)で尹東柱が紹介され、1990年には日本の教科書に載り、日本での知名度は一層高まることとなった。さらに、1995年には尹東柱所縁の同志社大学キャンパス内に「序詩」の詩碑が建てられた。その詩碑に刻まれているのは伊吹郷訳である。

しかしながら、その翻訳を巡ってこれまで様々な論争が起きている。まず、1995年に韓国の『朝鮮日報』で最初の伊吹郷訳への批判が提起された(조 1995)¹。尹東柱の代表作「序詩」の伊吹郷による日本語訳は誤訳が多く、原詩をゆがめているという指摘であった。また、それから2年後の1997年には、日本でも大村益夫によって「尹東柱をめぐる四つのこと」(大村 1997)というタイトルで、伊吹郷訳への批判が公にされた。このような批判が登場したのは、1984年『空と風と星と詩』が伊吹郷によって訳されてから、実に10年も経ってからのことであった。ただし、それらの批判の内容には、必ずしも的を射ているとは言い難いところが多くある。例えば、尹東柱を抵抗詩人として民族主義の色濃い詩人だと強調したり、キリスト教的な詩人としての尹東柱に力点を置きすぎたりして、その批判の内容にはある種の「偏り」がみられる²。

しかし、筆者がみるところ、伊吹郷は原文をある程度意識しているところはあるものの、伊吹郷本人も述べている通り、彼は尹東柱の詩を「実存凝視の愛の表白の詩」³として解釈している点で首尾一貫した訳を試みている。

このように伊吹郷訳への議論がなされているが、一方で、伊吹郷訳を高く評価した詩人もいる。前述したように、尹東柱を日本に紹介した日本の女性詩人茨木のり子はその人物である。茨木のり子は1976年より韓国語を習い始め、韓国現代詩の紹介に尽力し、1991年には『韓国現代詩選』で読売文学賞（研究・翻訳部門）を受賞した。

さて、本論文ではこうした経緯を踏まえたうえで、再度尹東柱の「序詩」の翻訳問題について論じたい。そこで、まず注目されるのは、日韓の横断的な詩想を示した茨木のり子が伊吹郷訳を高く評価していたという事実である。こうした彼女の見解を参考にしつつ、論を進めることにしたい。また彼女は『韓国現代詩選』において、自らいくつも韓国の現代詩の翻訳を手がけている。そこでの彼女の翻訳上の特徴をみることで、伊吹郷訳を再検討するとともに、詩の翻訳一般に潜む問題点について筆者の見解を述べたい。

1. 序詩をめぐる

「序詩」は尹東柱が日本に留学に来る一年前に書かれた詩である。まず原詩を紹介する。

서시 윤동주

죽는 날까지 하늘을 우러러
한 점 부끄럼이 없기를
잎새에 이는 바람에도
나는 괴로와했다.
별을 노래하는 마음으로
모든 죽어가는 것을 사랑해야지
그리고 나한테 주어진 길을
걸어가야겠다.

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다

(윤 1948)

「序詩」は尹東柱の代表作として広く認められており、中学校、高校の教科書に掲載され(남 2016: 230), 愛唱されている。

この詩は尹東柱が渡日する前に、出版を断念した詩集『空と風と星と詩』⁴の巻頭に書かれた作品で、「序」詩として知られるようになった。8行の短い詩は、平易なハングルで書かれていて、最初の二行は、恥ずかしさを伴う自己省察の姿勢が反映されている詩句としてよく知られている(이 2008: 22)。

日本では1984年伊吹郷によって詩集『空と風と星と詩』(伊吹 1984)が初めて日本で完訳され、1995年には同志社大学キャンパス内に「序詩」の詩碑が建てられた。しかし、その訳に対しては様々な論争が起きている。

そこで、論争になっている伊吹郷訳の「序詩」を紹介する。ここでの我々の考察を進めるため、^{キムシジョン}金時鐘訳と比較してみる(以下、引用の下線部は論者による)。

序詩 伊吹郷訳

死ぬ日まで空を仰ぎ
一点の恥辱なきことを、
葉あい^{そよ}風にも
わたしは心痛んだ。
星をうたう心で
生きとし生けるものをいとおしまねば
そしてわたしに与えられた道を
歩みゆかねば。

今宵も星が風に吹き晒らされる。

(伊吹 2010: 15)

序詩 金時鐘訳

死ぬ日まで天を仰ぎ
一点の恥じ入ることないことを、
葉あいにおきる風にさえ
わたしは心思い煩った。
星をうたう心で
すべての絶え入るものを愛おしめねば
そして私に与えられた道を
歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。
(金 2012: 9)

二つの訳詩を比較してみると、最初に注目されるのは、伊吹郷訳の「空」が金時鐘訳では「天」になっていることである。これはほとんど同じような意味に捉えられるが、尹東柱がキリスト者だったことから論争は起きた。

荒川洋治の『渡世』(荒川 1997) には、伊吹郷訳の「序詩」をめぐる韓国『朝鮮日報』に批判の記事が出て、日本人としての回答をもとめられたことが書かれている。「はじめに」で言及した1995年10月31日付のチョ・ヒョンギョンによる記事である(丕 1995)。チョは、尹東柱の代表作「序詩」の伊吹郷訳は誤訳だらけで原詩をゆがめていると指摘し、「空(ハヌル)」は物理的な空ではなく、彼の胸のうちにある信仰の像をさすため、「天」とすべきであると批判した。それについて荒川洋治は、日本人の一部は「空」と書かれていても「天」と感じとる感性があるので訳は正当であると答えた(荒川 1997: 539)⁵。

ところで、伊吹郷はこの問題についてどういう答えをしたのか。伊吹郷の尹東柱全詩集『空と風と星と詩』にはそれに対して次のように書かれている。

この詩の素材、空、風、星は文字どおりに空、風、星で、それらは作者の他の詩篇、とりわけ自選の十八篇と密接にかかわり、また詩集の題名にもつながっている。自選詩集の巻頭詩として書かれたのだから当然である。したがって空、風、星をせ

まく見るのはあたらない。いくら異常な時代だったとしても、時代状況ばかり強調するのも偏った見方である。詩の解釈はせまく低くならぬようにしたいものである。一概にはいいがたいが、空や星は理想や希望、真善美の理想やそれへのあこがれを象徴すると見るのが妥当である。（伊吹 [1984] 2010: 295）

つまり、伊吹郷は「序詩」に書かれた「하늘^{ハヌル}（空）」を「信仰の像をさす」言葉としてみていないことである。

しかしながら、そもそも尹東柱の詩をキリスト教的観点から解釈し、「하늘^{ハヌル}」を「天」と訳すことは正しいと言えるだろうか。キリスト教の論者たちは彼の詩をキリスト教的世界観で分析しようとしたが（장 1991: 90）⁶、単純に信仰的告白の記録として詩を解釈しようとするキリスト教的観点の不備には批判的指摘が多くなされて来た（최 1999: 51）⁷。それにもかかわらず朝鮮日報は『『空（ハヌル）』は物理的な空ではなく、彼の胸のうちにある信仰の像をさす』と言い切っている。

実際韓国では「序詩」での「하늘^{ハヌル}」をどう解釈しているのか。『韓国学中央研究院デジタル韓国民族文化大百科事典』に収録された尹東柱の「序詩」に関する内容によると、「序詩」の最初の連では空のイメージが表象しているように、純潔の意思が現れ、理念的なことおよび限界的なこととの間の葛藤と不調和の中から来る恥ずかしさの情調が現れると説明している（김 2016）。

このほか、教学社から出版された中学校教科書の「序詩」の詩語の説明では「하늘^{ハヌル}」を、絶対的価値観の表象で、キリスト教的絶対者の世界とは異なる倫理的判断の主宰者、生の志向点、自己省察の媒体と記している（김 2016: 230）。

つまり、一般的に韓国では尹東柱の「序詩」を信仰の詩として解釈していないのである。したがって、『朝鮮日報』が「序詩」での「하늘^{ハヌル}」は「彼の胸のうちにある信仰の像をさす」と断定している点に関しては、どこからもその根拠を探すことはできない。『朝鮮日報』の主張は、議論の中の一つの説に過ぎないため、伊吹郷訳の「하늘^{ハヌル}」の訳が「空」になっていることの批判として妥当ではないと言えるだろう。

次は尹東柱の訳詩で一番論争になっている6行目である。

原文は、「모든 죽어가는 것을 사랑해야지」で、直訳すると、「すべての死にゆくものを愛さねば」となるが、それを伊吹郷は「生きとし生けるものを愛おしまねば」と訳した。なぜ伊吹郷は「모든 죽어가는 것을 사랑해야지」を「生きとし生けるもの」と訳したのだろうか。これをめぐる批判として、前にも触れた『朝鮮日報』掲載記事(조 1995)の内容を、荒川洋治のエッセーに掲げられた訳文により確認してみる。

「すべての死にゆくものを愛さなければ」は「すべての生きとし生けるものをいとおしまねば」に化けてしまった。当時の民族が直面したさまざまな受難と殺戮の歴史的現場を痛切に感じつつ読みすすめるこの山場が、漠然とした生命一般の摂理に転落して審美、感傷の相に陥っている。詩人にとって「すべての死にゆくもの」とは、時々刻々と迫り来る息詰まる痛みなのだ。具体的に死にゆく群像までを包みこんで愛を誓うものだ。(荒川 1997: 540)

また、大村益夫は「尹東柱をめぐる四つのこと」で、「『序詩』を書いた一九四一年十一月二〇日といえば……すべてが『死にゆく』時代だった。そうした『死にゆくもの』を『愛さねば』と叫んだ彼は、死に追いやるものに対しては激しい憎しみがあつたはずである。それを『生きとし生けるものをいとおしまねば』では、死にゆくもの、死に追いやるものも、一様に愛してしまうことになるのではなかろうか」(大村 1997: 108)と伊吹郷訳を批判した。

大村益夫の文章に対して伊吹郷は、「『生きとし生けるものをいとおしまねば』とは、……命あるすべてのものへの、愛の表白なのである。……『死に追いやるものに対しては激しい憎しみがあつたはずである』というのは主観的な推論にすぎず、この実存凝視の愛の表白には軍国主義の日本人に対する激しい憎しみなどかわりがない。この詩における感性や思索はそのようなものとは質を異にする」(伊吹 2010: 295)と答えた。

尹東柱は21歳になる年、明東村を出て延禧^{ヨンヒ}専門^{ソンモンギョ}学校に入学する。そのとき同時に従兄弟の宋夢奎も延禧専門学校に入学し、福岡刑務所でも一緒だった。つまり、宋夢奎とは一緒に育った兄弟のような

間柄である。宋夢奎は18歳のとき南京へ行って中国の独立運動に参加し、帰ってきたところ逮捕され、「要視察」の身分になっていた(寺 2004=2009: 166)。しかし、尹東柱が遺した詩や文章には政治的なメッセージなどはなかった。

1938年3月、すでに植民地朝鮮での朝鮮語教育は朝鮮総督府によって禁止・廃止され、翌年には「創氏改名令」が公布された。そういう状況で、ハングルで詩を書くというのは危険なことだったが、詩自体に反日本支配へのメッセージをこめたものはなかった。つまり、尹東柱が遺したものは反日的な要素を含まない抒情詩だけだったのである。

尹東柱は祖国を愛し、ハングルで詩を書いただけで、日本に対する憎しみや悔しさは、どの作品でも見当たらないし、だれの証言からでも確認することはできない。

以上「序詩」に関する様々な論争を挙げて考えてみた。問題になっている訳は伊吹郷訳であるが、日本人に馴染みやすくするため工夫を重ねた訳だと筆者には思われる。論争になっている「生きとし生けるもの」の訳は、原詩が持つ抒情の雰囲気と適合している訳であると考えられる。尹東柱の詩はそのすべてが抒情詩であり、平易なハングルで書かれている。そのため、「死にゆく」という言葉も韓国人には詩が書かれた時代(戦時)が背景であることをつねに念頭に置いて読んでいるため、特に違和感がない。しかし、日本では尹東柱を研究している専門家や、詳しく知っている人でないかぎり、抒情詩のなかでの「死にゆく」という詩句は違和感が生じる言葉になる可能性があるのではないか。こういう観点から考えると、尹東柱詩の伊吹郷訳は、日本の読者に合わせた訳であるといえよう。

2. 茨木のり子と伊吹郷

国語の教科書に掲載された「わたしが一番きれいだったとき」や「自分の感受性くらい」などで知られる茨木のり子(本名三浦のり子、1926-2006)は、日本戦後現代詩の長女⁸と評価される日本の女流詩人である。

詩集では『見えない配達夫』『自分の感受性くらい』『寄りかから

ず』『歲月』, また, 訳詩集では『韓国現代詩選』, さらにエッセイ集に『ハングルへの旅』『詩のころを読む』などがある。1989年『ハングルへの旅』の最終章で尹東柱を紹介し, このエッセイが筑摩書房の高校教科書に「空と風と星と詩」(安藤ほか 2006: 110)というタイトルで載り, 尹東柱は広く日本に知られることとなった。

1976年より韓国語を学び始めた茨木のり子は, 30歳を過ぎたころ心に残った仏像が朝鮮系であることに気づき, 見えない糸にたぐり寄せられるように50代からハングルを学び始めた。と自分の著書『ハングルへの旅』の中で述べ, 韓国に対する関心を示している(茨木 1989: 14)。同書のあとがきでは, 「隣国語の魅力, 面白さに, 色々な角度から光をあてて, 日本人, 特に若い人たちに『私もやってみようかな』と, ふと心の動くような, いわば誘惑の書を書きたかった」(茨木 1989: 257)と述べた茨木のり子は, 尹東柱の存在を知ってから少しずつその詩の日本語訳を試みていた。その最中1984年に伊吹郷によって『空と風と星と詩』の完訳が出版され, 茨木のり子はその完訳について次のように述べている。

尹東柱は日本検察の手によって殺されたようなものであって, いずれは日本人の手によって, その全貌があきらかにされなければならないひとだったし, その存在を知ってから尹東柱の詩の訳をはじめていたのだが, 彼が逝ってから三十九年目にあたる一九八四年に, 伊吹郷氏によって, 全詩集『空と風と星と詩』(記録社)の完訳が成った。

私の氣勢は削がれたが, 伊吹郷氏の見事な訳と研究には完全に脱帽で, 可憐な童謡にいたるまで日本語で読めるようになったのは, なんともうれしいことだった。原詩を知る者にとっては, なみなみならぬ労作であることがわかる。(茨木 1989: 243)

尹東柱の全集—といっても一卷だが, 『空と風と星と詩』は, 伊吹郷氏の全訳で影書房から出ている。二十七歳で獄死に至るその短い生涯を, 真摯に追及した研究も付された労作だった。(茨木 2009: 85)

上記の引用からも明らかなように, 茨木のり子は伊吹郷訳を高く

評価している。以降、文中に尹東柱の詩を引用するときはすべて伊吹郷訳を使っている。ハングルを題材にして一冊の本を書いた茨木のり子が、誤訳であるという批判の多い伊吹郷訳の「序詩」を自身のエッセイ「尹東柱」（茨木 1989: 241）の冒頭に掲げているのである。

さて、前述したように、同エッセイが1990年筑摩書房の現代文教科書に掲載され、教材のひとつになった。韓国で尹東柱はその名前を知らない人がいない程有名であるが⁹、日本ではあまり知られていないため、教科書の検定を通すために、当時、編集部の野上龍彦が払った努力は並大抵のものではなかったという¹⁰。

茨木のり子は50歳の頃から韓国の言葉と文化に関心を寄せて学びをはじめ、1990年に65歳で訳詩集『韓国現代詩選』（茨木 1990）を出版した。1987年から3年間、季刊詩誌「花神」に連載したものを中心に編んだ『韓国現代詩選』は、12人の韓国現代詩人の作品62編を翻訳したアンソロジー訳詩集である。同書は韓国現代詩紹介で大きな役割を果たし、1991年には読売文学賞を受賞した。

茨木のり子は、「独断や偏見を恐れずに、1980年代の、それぞれタイプの異なる、自分の気に入った詩だけを……現代の流れとともに、そう簡単に消え去ってはしまわない、独立性の高い詩だけを集めてみたかった」（茨木 1990: 194）と、あとがきで述べ、韓国現代詩にたいする関心と理解、そして深い愛着をもっていることを記している。

3. 茨木のり子の翻訳

そこで、ここでは茨木のり子が伊吹郷訳を問題視しなかった理由をいくつかの例をあげ、検討したい。まずは、茨木のり子の翻訳に注目することから始めよう。

茨木のり子の翻訳の特徴を示すために、彼女の『言の葉Ⅲ』（茨木 2002）に収録されている『韓国現代詩選』の訳詩をみてることにする。『言の葉Ⅲ』に収録されている作品は、茨木のり子が晩年に自ら選定して収録した詩作であり、詩人が名作と自信を持っている作品であるといえるだろう。

まずは、趙炳華（^{チヨビョンハ} 1921–2003）の「別れる練習をしながら」に注

目してみよう。(下線は筆者による)

別れる練習をしながら 茨木のり子訳

別れる練習をしながら 生きよう
立ち去る練習をしながら 生きよう

.....

(訳者による省略, 下同)

たがいに時間切れになるだろうから
しかし それが人生
この世に来て知らなくちゃならないのは
‘立ち去ること’なんだ

なんともはやのうすら寒い闘争であったし
おのずからなる寂しい唄であったけれど

別離のだんどうを習いつつ 生きよう
さよならの方法を学びつつ 生きよう
惜別の言葉を探りつつ 生きよう

.....

人生は 人間たちの古巣
ああ われら たがいに最後に交す
言葉を準備しつつ 生きよう

別れる練習をしながら (茨木のり子訳+省略部分の拙訳)

別れる練習をしながら 生きよう
立ち去る練習をしながら 生きよう

美しい顔, 美しい目

美しい唇, 美しい首

美しい手首

たがいに時間切れになるだろうから

しかしそれが人生

この世に来て知らなくちゃならないのは

‘立ち去ること’なんだ

なんともはやのうすら寒い闘争であったし

おのずからなる寂しい唄であったけれど

別離のだんどうを習いつつ 生きよう

さよならの方法を学びつつ 生きよう

惜別の言葉を探りつつ 生きよう

美しい自然, 美しい人生

美しい情, 美しい言葉

置いて行くことを学びつつ 生きよう

立ち去る演習をしながら生きよう

人生は 人間たちの古巣

ああ われら たがいに最後に交す

言葉を準備しつつ 生きよう

(茨木 2002: 203)

この作品を原詩と比較してみると、2聯の3行を始め、5聯の全行、6聯の2行を省略したことがわかる。原詩をよく知っている韓国人が読むと、この詩のハイライトとも言える反復詩句を大胆に省略した茨木のり子の翻訳に驚くだろう。これはあえて意図的に省略したとしか考えられないのだが、その理由はなんだろうか。

茨木のり子が省略した反復の詩句は、韓国語では「아름다운^{アルム ダウン}」という修飾語で、話者が感じている「아름다운(美しい)」人生に関する叙情的観念を含むフレーズである。韓国で「아름다운(美しい)」は「아름」+「다운(らしい)」の形で、その語源については3つの説がある。ソ・ジョンボムによれば、「아름」を「知」「抱」「我」

のうち、どちらを取るかによって説は分かれるが、名詞化された動詞に「다운(らしい)」がついて形容詞になることは通時的に不可能であるということで、「아름」を「我」とみるべきであるという意見が説得力を得ている(서 2000: 280)。そうすると「아름다운(美しい)」は、「아름(我)」+「다운(らしい)」の形で、「私(我)らしい」という語源を持ち、自分のみならず、子どもや肉親、故郷、また国や大自然のことを指す主観的な言葉である。

しかし、これを日本語で翻訳すると「美しい」という語彙を連続して書くことによって叙情性は薄くなり、この世への心残りと未練が強くなってしまうと思われる。つまり、「아름다운(美しい)」という修飾語の反復をそのまま日本語で訳すと、原詩がもっている雰囲気著しく損うという理由から、その詩句をあえて省略し「別れる練習」の「離別の準備」の意味を強調したいと茨木のり子は考えたのではないか。

またそれと連関して6聯の「置いて行くことを学びつつ 生きよう/去る演習をしながら 生きよう」の箇所を省略したことも注目される。日本では同じ言葉を繰り返す書くことを避ける習慣があり、たとえばこの詩でも「……ながら」,「……つつ」と訳されているところは実は,「……^{미코}며(ながら)」という同じ接続語で書かれている。そこを茨木のり子は1聯では「……ながら」と訳し、4聯では「……つつ」と訳したが、6聯でまた同じ詩句が反復される。茨木のり子は日本語に訳するとき何よりもまず詩の全体の雰囲気を優先することで、大胆な省略に踏み切ったと考えられる。このような訳からは、省略という果敢な方法を採用してまで日本に馴染むような翻訳をしようとした茨木のり子の工夫が伺える。

さらには、新川和江が「凛々しい茨木さん」と評価したように¹¹、意志の弱さと未練さを思わせる詩行を果敢に省略したと推測することもできるだろう。こういう翻訳者の大胆な判断から、茨木のり子の人生観が重ねてみえてくる。最後の「ああ われら たがいに最後に交す/言葉を準備しつつ 生きよう」のところは本来は「習いしつつ 生きよう」である。ここからは、茨木のり子が死んだ後に公開された、死の前に準備した挨拶文を想起せざるを得ない¹²。

次は^{ホンユンスツ}洪允淑(1925-2015)の「人を探しています」である。

人を探しています 茨木のり子訳

人を探しています

年は はたち

背は 中ぐらい

まだ生まれた時のまんまの

うすももいろの膝小僧 鹿の瞳

ふくらんだ胸

ひとかかえのつつじ色の愛

陽だけをいっぱい入れた籠ひとつ頭に載せて

或る日 黙ったまま 家を出て行きました

……（訳者による省略）

（そして30年霧の中に渺然 [省略部分の拙訳]）

誰かごらんになったことはありませんか

こんな世間知らずの ねんね

もしかしたら今頃は からっぽの籠に

白髪と悔恨を載せて

見知らぬ町 うすぐらい市場なんかを

さまよい歩き綿のように疲れはて眠っていたりするのでは

連絡おねがいたします

宛先は

私書箱 追憶局 迷子保護所

懸賞金は

わたしの残った生涯 すべてを賭けます

（茨木 2002: 203）

この訳詩の場合も原詩の9行目を省略している。この詩は、当時KBS放送局を通して全国的に離散家族探しが行われたことがモチーフで、民族的、歴史的痛恨をこめた詩であると同時に、9行目の「或る日 黙ったまま 家を出て行きました」と、省略された10行目の「そして30年霧の中に渺然」より分かるように、話者個人の悔恨も詠っている。実際この詩の作者である洪允淑の故郷は平安北道定州郡（現在は北朝鮮）で往来できず、故郷なのに他郷でしかあり

えないということが、この詩に大きな影響を落としている（茨木 2010: 75）。言い換えると、こうした訳者の意図的な省略からは、個人的回顧や悲しみの意味より韓国の歴史と社会の内面にこめられた痛みを重視している訳者の意図が伺える。この訳についてヤン・ドングックは次のように書いている。「人を探すという内容が強調され、詩想の一貫性が感じられる。翻訳者が日本語で訳した詩で、抒情的自我の回顧を省略したのは、韓国の社会相を知らせながら、分断国家としての痛みとその実相を強調するための方策であったと考えられる（拙訳）」（『 2014 : 131）。

さて、こうして挙げられた例は、茨木のり子の訳でよくみられる特徴であって、このことは翻訳もまた文学的創作であるという翻訳にたいする考え方が、翻訳作業の中心に置かれていたことを思わせる。また、翻訳対象が詩であるという事実を念頭におくと、女性詩人としての詩創作に対する自負心と信念が、思いきった省略に繋がったとも考えられる。

翻訳には一般的に二つの原則がある。一つは、意識とも呼ばれ、翻訳される言語（ソース言語）の能動的機能を重要視するdomesticationの原則。二つは、逐語訳と呼ばれ原典の内容や言語の特徴を棄損させないでターゲット言語を適応させようとするacceptanceの原則である。当然、その二つを適切に混用する翻訳もあるし、そうした翻訳が高く評価される（引 1996: 136）。

茨木のり子が詩の一部を省略してまで、詩的完成度と詩想の一貫性を重視して翻訳したのは、原典の内容を棄損させているという意味でacceptanceの原則と対立する。このことから、茨木にはdomesticationに該当する創造的翻訳観が強く存在していたのではないかと推測できる。ソース言語の能動的機能を重要視する創造的翻訳は、従来の翻訳理論でも、近來の翻訳でも重要である。ミカエル・ウスティノフが『翻訳——その歴史・理論・展望』で、「原作のテキストが鏡に映った複製のように、観念的に現れでるような翻訳はありえない。この領域には『コピー』は存在し得ない。なぜならそこにはつねに言語の動き（「エネルゲイア」）が……介在するからである。……つまりわれわれは、翻訳があらゆる変容を引き起こしてしまう事実を非難できない」（ウスティノフ 2008: 22）と述べたように、翻訳作業においての原典の変容は非難できないことではない

か。それどころか、言語の性質そのものに合致しているという意味で、高く評価できることである。

さてここで、改めて伊吹郷訳の「序詩」を考えてみよう。「序詩」は10行あまりの短い詩であるが、その詩に関して、誤訳だと指摘されるところは、なんと6箇所もある¹³。平易なハングルで書いてある短い詩の翻訳に対して決して少ないとは言えない批判があるのは異例なことである。

伊吹郷の「生きとし生けるものを愛おしまねば」という訳は、茨木のり子のようにソース言語よりターゲット言語を重視して、日本の文化と言語に合わせた訳である。また「実存凝視の愛の表白」として尹東柱の詩を読み、その詩想に合わせた一貫性のある訳で、日本語として詩的完成度の高い訳詩である。その訳詩にたいして、茨木のり子は、伊吹郷訳が批判され始めるときから10年も前に、「原詩を知る者にとっては、なみなみならぬ労作であることがわかる」（茨木 1989: 243）と書いたのである。

4. 「生きとし生けるもの」

次に、茨木のり子が伊吹郷訳を問題視しなかったもう一つの理由としてあげられるのは「生きとし生けるものをいとおしむ」という一句にあると思われる。

「序詩」の伊吹郷訳で一番指摘の多い「生きとし生けるもの」という訳に関して木下長宏は、『『生きとし生けるもの』という一句は一千年ものあいだ『日本人』に愛されてきた一句であり、これは『古今和歌集』の『序』に紀貫之が書いていた句で、日本の詩の起源を語るものとして、『花に鳴く鶯水にすむ蛙の声を聞けば生きとし生けるもの、いずれか歌を読まざりける』というところ、それが後世口ずさまれつづけて、われわれ日本語の詩を愛する人びとの心と脳の裏に沁みこんだ言葉となっていったのだ』（木下 2007）といっている。

つづけて 木下長宏は、「伊吹郷氏はきっとここは『生きとし生けるもの』だ、となにげなくインスピレーションに打たれたようにこの一句を選び『すでに死んでいく者に』代えた」（木下 2007）のであ

って、「訳者は無意識的の裡にそうやっている。だからこそ恐ろしいし、より罪深くさえある」（木下 2007）と伊吹郷訳を批判している。

確実にその部分は原詩の「すべての死んでいくもの」とは異なるが、木下長宏の言葉を借りていうと、「生きとし生けるもの」という一句は、日本語の詩を愛する人びとの心の襞に沁みこんだ言葉であるので、むしろ「序詩」が抒情詩として日本人に愛されるのではないか。木下長宏は『古今和歌集』を挙げて、あたかもそれが「日本人」の「日本語の詩を愛する人々」の「心と脳の襞に沁みこんだ言葉」であるように言ったが、その考え方は、「日本人」と「日本語」をイコールでつなげて、その「外部」を認めないという考え方である。茨木のり子は、そのような閉じられた言語観をもってはいなかった。

茨木のり子は1976年からハングルを習い始めていたので、1984年伊吹郷によって完訳『空と風と星と詩』が出たときは、すでに「すべての死んでいくものを愛さねば」の訳が「生きとし生けるものをいとおしまねば」になっていることに気づいたはずである。天皇制を温存する日本国家への怒りを堂々と書く批判精神の強かった茨木のり子が¹⁴、誤訳であることを知りながら「伊吹郷氏の見事な訳と研究には完全に脱帽」（茨木 1989: 243）だと自分の著書に書く必要はなかったとも言える。

ひとつ興味深い事実は1984年に伊吹郷の『空と風と星と詩』の完訳が出るさらに5年前の1979年に、茨木のり子が出版した著書『詩のこころを読む』のまえがきの書き出しに「いい詩はまた、生きとし生けるものへの、いとおしみの感情をやさしく誘いだしてくれます。どこの国でも詩は、その国のことばの花々です」（茨木 1979: iii）と書かれていることである。茨木のり子も詩人として、『古今和歌集』の一句であるこの言葉に共感するものがあつたのではないか。

5. 批判の台頭

植民地時代、日本の言語は最上位の言語であった。当然、被支配者である朝鮮の言語は最下位言語で、日本国内でその言語は翻訳を

通して帝国文化の中に配置された。しかし、日本の敗戦で帝国主義から朝鮮が自由になった後にも日本語習得によって成長した知識層はなお権力を独占していた。また、日本の敗戦後の韓国文学の受容は『朝鮮詩集』¹⁵のように韓国人によって翻訳されたものだけだったことから、まだ同等な立場での受容とはいえない。朝鮮文学は第三国文学という優越的視線、あるいは好奇心によるものだったという点を否定できない。それを茨木のり子は意識していたことが次の文で分かる。

第一、詩翻訳にしても、英語、フランス語、ロシア語、なんかの達人はいっぱいいて名訳で読めるのに、隣国の詩を訳せる詩人が一人もいないというのは驚くべきことです。やりはじめてみていっそうその驚きが深くなりました。(茨木1989:19)

こうした背景を持つ時代であった1984年、はじめて尹東柱の詩が日本人によって完訳されたのはやはり注目に値する。そして、そのことの「驚き」を忘れ、完訳が出てから10年も経った1995年に、伊吹郷訳は誤訳だらけだと韓国のメディアが指摘を始めた。なぜその時、韓国のメディアは伊吹郷訳に注目したのか。

『朝鮮日報』から初めて伊吹郷訳の批判の記事が出た1995年は、光復50周年で1910年朝鮮を統治するために設置された官庁である朝鮮総督府が「歴史立て直し」と「景福宮復元」の一環として撤去された年である。^{キムヨンスン}金泳三政権は政権のスローガンとして「歴史立て直し」を主張し、それを国策として推進した。解放50周年を機に行われた旧朝鮮総督府庁舎撤去はその象徴でもあった。その日は光復会員、各界代表、海外同胞、一般市民など約5万名が参加して撤去儀式を見守った。旧朝鮮総督府ビルは故宮・景福宮の敷地であって、解放後は中央政府庁舎や国立中央博物館として長く使われていたのだが、この年8月15日の光復節記念祝賀行事の一環として爆破・撤去されたのである。

光復50周年ということもあったが、金泳三政権の「歴史立て直し」という政策によって、新聞のみならずテレビやラジオでも光復50年を連日報道していた時期であった。そんななか、10月31日に朝鮮日報から伊吹郷訳の批判の記事が出たのである。尹東柱を国家

のために犠牲となった民族詩人とし、その彼の詩を歪めた日本の翻訳に対する批判の記事を出したのは時宜になかったとも言える。しかも、それをうけて日本の知識人たちもまた伊吹郷訳を批判し始めたのだ。

特定の文化は他の文化より優越な支配力を持っているため、翻訳は同等な立場での文化交流ではなく、非対称的な文化交流になる可能性が少なくない。その代表的な例として「世界文学全集」に関する論議が挙げられる。韓国では多くの出版社が「世界文学全集」の新しい翻訳版を次々と刊行しているが、その無分別な再翻訳に関し、以前から指摘がなされてきた。特に、西洋中心の作品選定に問題があると指摘し、第三国文学や韓国文学も世界文学全集に包含させるべきだということで論議が続いている。それに加えて、翻訳の質に関しても様々な議論がなされている(정 2014)。

しかし、韓国文学が世界でどう訳されているかについての問題はあまり研究が進んでいない。外国の文学の訳し方への関心は高まりつつあるが、逆の場合に関しては無関心であるとも言えよう。韓国文学が外国で翻訳出版されると、そのことはマスコミに大きく取り上げられる。しかし、伊吹郷訳の「序詩」のように、翻訳が出版されてから10年も経ったうえで、具体的な例を挙げながら批判がなされたのは異例のことである。こうしたマスコミによる批判は、例えば「序詩」の訳に疑問を感じた特定の個人が翻訳者や編集者に手紙を送ることとは、大きく質を異にする。このような公による批判は、何を意味するのだろうか。

今日韓国では「言語」の翻訳だけではなく、その言語が属した「文化」を移すという、広い意味での翻訳が注目されている。特に「文化の翻訳」としての翻訳を考察する近年の研究は、翻訳に隠蔽された権力、イデオロギーの関係を問題視するだけに、文化間の受容、妥協に注目している(이 2015)。そして翻訳もまた創造であるという概念は韓国でも認識されてきた。それにもかかわらず、伊吹郷訳への批判がなされたことは、文学テキストの翻訳に関してではなく、日本に対してのある種の「主張」であったと考えられる。それは「歴史問題についてもはや韓国は黙ってはいない」という日本に対する政治的主張であろう。朝鮮総督府が破壊され、金泳三政権が「歴史立て直し」という政治スローガンを掲げたのと同時期に行

われた、その主張は説得力を持つものにも思われたが、結果的に、翻訳に悪い影響を与える原因となった。その結果として日本では、尹東柱詩の再翻訳が繰り返されている。こうして伊吹郷の「生きとし生けるもの」という、文学的で「文化の翻訳」ともいえる新しい翻訳の試みは、今や日本で尹東柱を研究しようとする人たちには定説のように誤訳であるとみなされている¹⁶。

結論

韓国文学翻訳院によると、韓国文学の世界進出が本格化されたのは、1990年代のことであり、その進出背景は国家の海外翻訳出版支援事業にあるとみている（한국문학번역원 2015）。こうしたことを踏まえて考えると、伊吹郷による『空と風と星と詩』の完訳は、韓国の出版支援事業が行われる前になされたという点で、その価値と意義は高く評価されなければならない。

最初の翻訳が必ずしも優秀な翻訳だということではない。翻訳文学市場において、文化的優位性を反映するように、西欧の文学を中心とした翻訳が盛況した状況の中、日本人として被植民地であった韓国の文学を初めて完訳した伊吹郷の業績¹⁷は記念すべきことであろう。

翻訳に介入される翻訳の倫理と政治性を問うのは、二つの異なる言語が透明に交換され得るということの不可能性を再確認する作業であろう。自らの文化圏の中に自然に染み込むような翻訳を試みた伊吹郷訳は、翻訳形式面において評価されるべきであり、さもなければ政治的、歴史的要素によって、翻訳が進むべき方向は見失われてしまう。

「序詩」は日本語訳以外に中国語、英語、フランス語、スペイン語など、多くの国で訳され読まれているが、特に日本語翻訳に関して韓国は敏感である。尹東柱が韓国語で詩を書いたために逮捕され、日本で獄死した経歴を持つがゆえに、とりわけ日本語訳に注目されることになるのだろうが、それが歪んだ仕方でも無条件的に批判されてはならない。自国民の詩が外国で愛され、読まれていることは本来喜ぶべきことであり、だからこそ訳詩を客観的に見る必要がある

のではないか。

確かに原作の透明で完璧な翻訳はあり得ないという意味で、客観的な立場などないのかもしれない。しかし、他方で歪んだ愛国心、および政治的思惑によって詩そのものが歪められてはならないのも事実である。したがって、客観的な立場はあり得ないとしても我々は両者の狭間にいることをつねに自覚しつつ、冷静かつ詩の内容に即した立場から尹東柱詩の日本翻訳と向き合う態度が必要である。

〔注〕

- 1 この批判の主要な論点については、「1. 序詩をめぐって」で検討することにする。
- 2 このことに関しては「1. 序詩をめぐって」で詳しく述べる。
- 3 「この実存凝視の愛の表白には軍国主義の日本人に対する激しい憎しみなどかわりがない。この詩における感性や思索はそのようなものとは質を異にする」（伊吹 2010: 296）。
- 4 ジョン・ビョンウックによれば、尹東柱が『空と風と星と詩』の出版を断念した事情は次のとおり。「1941年、尹東柱はヨンヒ専門学校の卒業を記念に自選詩集『空と風と星と詩』を出版しようとしたが、学科長であったイ・ヤンハが出版を保留するよう勧告する。当時は文学的暗黒期で、日本は公式的にハングル使用を禁止し、ハングル版の新聞、雑誌などを廃刊させた。こういう時代状況でイは「もう一つの故郷」「十字架」「悲しい族属」のような作品は官憲の検閲を通過できないし、身の安全も危くなると判断し、出版を断念させたと思われる（拙訳）」（정 1976: 140）。
- 5 本稿で『朝鮮日報』の記事（조 1995）は、荒川洋治の訳を用いている。荒川洋治の反応にも触れる必要上、荒川自身の理解に従って示した方がいいと判断したこと、論を進める上で筆者の訳より的確に記事の内容に沿って訳してであると判断したからである。
- 6 カン・シンジュは、尹東柱の詩に現れる「空」「星」「十字架」は、詩人の信仰の表象であり、これらは憧れの対象である神のイメージを表すと見ている（강 1991）。
- 7 チェ・ムンジャは、尹東柱の詩を信仰的告白の詩として解釈しようとするキリスト教的観点を批判し、尹東柱の詩に対する理解や解釈を拡大させるべきであると主張した（최 1999）。
- 8 新川和江は「現代戦後詩の長女」という評論を発表した（山本ほか 1985: 99）。
- 9 「韓国の新聞では、何年かおきに、読者による詩人の好選度（好感度）というのが載る。二度見たが、二度とも第一位は尹東柱で、ほかの詩人は乱高下がはなはだしい」（茨木 2009: 83）。
- 10 それに関して茨木の子りは、「検定は通ったものの日韓の近代史にまったく無関心な教師が学校で教えるのは大変だろう」と心配したと言う（茨木 2009: 84）。
- 11 「今も広く読みつがれている「わたしが一番きれいだったとき」の、「ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩」く、若く凛々しい茨木さん」（新川 2006）。
- 12 「このたび私06年2月17日クモ膜下出血（死亡の日付と死因のみ遺族の記入）にてこの世におさらばすることになりました。これは生前に書き置くものです。私の意志で、葬儀・お別れ会は何もいたしません。この家も当分の間、無人となりますゆえ、弔慰の品はお花を含め、一切お送り下さいませんように。返送の無礼を重

ねるだけと存じますので、「あの人も逝ったか」と一瞬、たったの一瞬思い出して下さればそれで十分でございます。あなたさまから頂いた長年にわたるあたたかなおつきあいは、見えざる宝石のように、私の胸にしまわれ、光芒を放ち、私の人生をどれほど豊かにして下さいましたことか…。深い感謝を捧げつつ、お別れの言葉に代えさせていただきます。ありがとうございました」（茨木 2006）。

- 13 本論文では比較的批判の多い「空」と「生きとし生けるもの」の訳に関する内容を考察したが、その他に伊吹郷訳で誤訳であると指摘されるところは次のとおりである（下線〔批判の箇所〕は筆者による）。「死ぬ日まで空を仰ぎ／一点の恥辱（はじ）なきことを／葉あいにそよ風にも／わたしは心痛んだ。／星をうたう心で／生きとし生けるものをいとおしまねば／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。／／今宵も星が風に吹き晒られる。」（畠 1948= [1984] 2010: 15）。
- 14 戦争責任を問われて／その人は言った／そういう言葉のアヤについて／文学方面はあまり研究していないので／お答えできかねます／思わず笑いが込みあげて／どす黒い笑い吐血のように／噴きあげては 止り また噴きあげる「四海波静」（宮崎編 2010: 180）なぜ国歌など／ものものしくうたう必要があります／おおかたは侵略の血でよごれ／腹黒の過去を隠しもちながら／口を拭って起立して／直立不動でうたわなければならないか／聞かななければならないか／私は立たない坐っています「鄙ぶりの唄」（宮崎編 2010: 237）。
- 15 『朝鮮詩集』（金 [1954] 2010）は、帝国主義のなかでの文化権力と帝国の言語との関係を考察する際に、典型的事例となる韓国人による翻訳詩集である。金素雲の伝統的な律格に従った文語形式の翻訳は、日本近代詩壇に向けた追従を意味し、文化的位階秩序に順応した側面があると思われる。しかし、日本で『朝鮮詩集』は多くの文学者に好評を得て、1954年には岩波文庫版まで出版されるようになった。
- 16 「伊吹訳のこの部分が誤訳であることは、尹東柱を研究している人たちのあいだではもう定説になっていて、その後の訳者は同じ轍を踏まない」（木下 2007）。
- 17 日本で尹東柱がはじめて紹介されたのは、許南麒訳編の『朝鮮詩集』（青木書店、1955）に収録された一篇の詩「悲しい族属」によってであろうと思われる（宇治郷 2002: 64）。文学全集の一部で尹東柱の詩が紹介されたことはあるが、本格的に紹介され、尹東柱の全詩が翻訳されたのは、1984年出版された伊吹郷訳の尹東柱全詩集『空と風と星と詩』が初めてである。

〔文献〕

- 荒川洋治、1997、『渡世』筑摩書房。
 安藤宏ほか、2006、『精選現代文B』筑摩書房。
 茨木のり子、1979、『詩の心を読む』岩波書店。
 ———、1989、『ハングルへの旅』朝日新聞社。
 ———、1990、『韓国現代詩選』花神社。
 ———、1994、『一本の茎の上に』筑摩書房。
 ———、2002、『言の葉III』筑摩書房。
 ———、2006、『茨木のり子の訃報』朝日新聞2006.3.20。
 伊吹郷、[1984] 2010、『空と風と星と詩』影書房。
 宇治郷毅、2002、『詩人尹東柱への旅——私の韓国・朝鮮研究ノート』緑蔭書房。
 大村益夫、1997、『尹東柱をめぐる四つのこと』尹東柱詩碑建立委員会編『星うたう詩人尹東柱の詩と研究』三五館、104-24。
 木下長宏、2007、『Y 尹東柱』木下長宏のホームページ、（2015年12月31日取得、<http://kinoshitan.com/archives/archivesy.html>）。
 金時鐘、2012、『空と風と星と詩』岩波書店。

- 金素雲編訳, [1954] 2010, 『朝鮮詩集』岩波書店.
- 新川和江, 2006, 「茨木のりさんを悼む」 毎日新聞2006. 2. 21.
- ミカエル・ウスティフ, 2008, 服部一郎訳『翻訳——その歴史・理論・展望』白水社.
- 宮崎治編, 2010, 『茨木のり子全詩集』花神社.
- 山本安英ほか, 1985, 『茨木のり子』花神社.
- 강신주, 1991, 『한국현대기독교 연구』숙명여자대학교대학원.
- 김영무, 1996, 「문학행위로서의 번역」『영어영문학』한국영어영문학회, 119-28.
- 김재홍, 2016, 「서시」한국학중앙연구원 디지털한국민족문화대백과사전 (2016년 01월02일취득, <http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Index>).
- 남미영, 2016, 『중학국어5』교학사.
- 서정범, 2000, 『国語語源辞典』보고사.
- 송우혜, 2004, 『윤동주평전』푸른역사. (=2009, 愛沢革訳『尹東柱評伝』藤原書店.)
- 양동국, 2014, 「이바라키노리코와 번역」『비교일본문학』상명대학출판, 124-46
- 윤동주, 1948, 『하늘과 바람과 별과 시』정음사. (= [1984] 2010, 伊吹郷訳『空と風と星と詩』影書房.)
- , 1948, 『하늘과 바람과 별과 시』정음사. (=2012, 金時鐘訳『空と風と星と詩』岩波文庫.)
- 이명진, 2008, 『윤동주시 연구』대구대학교교육대학원.
- 이재원, 2015, 「번역의정치화와 보편성으로서의번역」동국대학신문 (193) 2015. 12.7.
- 정병욱, 1976, 「잊을수 없는 윤동주」『나라사랑』외솔회, 140-49.
- 정운기, 2014, 「번역의윤리와 정치성」『Trans Humanities』Ewha Institute for the Humanities, 39-67.
- 조형근, 1995, 「왜곡된 일본어역」조선일보1995.10.31.
- 최문자, 1999, 『현대시에 나타난 기독교사상의 상징적 해석』태학사.
- 한국문학번역원, 2015, 한국문학번역 (2015년12월24일 취득, <http://www.koreanbooks.or.kr/>).